

「人として生きる」

宮城県 仙台市立第一中学校 3年

佐藤 萌（さとう もゆる）

戦後七十年の節目となった今年の夏は、観測史上初の猛暑を記録して、全国の人々は暑さで苦しめられた。七十年前の夏はどうだったのだろうか。終戦を迎えた夏は、暑さだけではなく、深い悲しみが人々の心身を苦しめたことだろう。戦争という悲劇から、基本的人権について考えてみようと思う。

同居している八十九歳の祖母は、夏になると悲しい記憶を語り出す。進行性の認知症を患っていて、新しい記憶はほとんど忘れてしまうが、七十年以上も前の出来事を、詳しく淡々と語るのだ。話の一つ一つが悲しく、重く伝わって来る。そして悲しみと恐怖心が、私の中で年々大きくなっているのを感じる。

祖母が生まれたのは、中国の満州、撫順という場所で、曾祖父は満州鉄道に勤務して、外国人の労働者を受け入れ、派遣する部署の役職に就いていた。家族は役職者用の社宅に住み、生活環境の整った恵まれた暮らしをしていた様だ。曾祖父は仕事でも中国やロシアなどの外国人と関わり、自宅にも身の周りの世話をする外国人を数名雇っていた。当時満州鉄道で働いていた外国人の多くは、生活のために過酷な労働を強いられ、生活の格差は子供の目でも分かるほどだった。そんな暮らしの中で、穏やかで誠実だった曾祖父は、地位や国籍に関わらず、たくさん有る物資や食糧は、できるだけ分け合う努力をしていた。家に入出入りしていた外国人とその家族達にも、食糧や衣類、時には薬なども手配し、生活が向上するように、日々心がけていたそうだ。誰に対しても平等に接して、平等に生きるチャンスを与えようと努力した父親が、祖母はとても誇らしかったという。そして曾祖父のこの生き方が、終戦の時、祖母の大家族を救うことに繋がったのだ。

終戦を迎え、曾祖父が役職に就いていたため、祖母達家族は引き揚げまでにかなりの時間が経過していた。満州を出るまでの日々は、死を覚悟するほど悲惨な状況で、今でも祖母は全てを話す心境にならない。今まで共に生き暮らした中国やロシアの人々が、敵国の人となって、家族を苦しめていた。略奪や拉致、殺人、非道な事を目の当たりにして、戦争がこんなにも人々を変えてしまうのかと、悲しみや恐怖を超えた複雑な感情になっていたという。しかしその悲惨な状況の中、祖母の家族を救ってくれたのは、長年家で雇っていた中国人の人達だった。食糧を集めてくれたり、危険な生活を陰ながらサポートして、日本に戻れる様に支えてくれた。彼らにとっても命がけの手助けで、最後は、引き揚げ船までの長い道のりを、一人も欠けることなく移動する手配をして、船に乗せてくれたのだ。曾

祖父の生き方が、人の心を動かし、人として大切な心を育てていたのだと感じる。もし曾祖父が、日頃から差別的で有ったり、私腹だけを肥やしていたら、支え、助けてくれる人も無く、今の私も存在しなかつただろう。

ここから、大戦中に起きた様々な人権侵害から、基本的人権の尊重がどれほど大切な権利なのか、祖母は身をもって知っているのだ。そして祖母の話を書く度に、曾祖父の生き方の様に、地位や国籍に関係無く、どんな状況でも守るべきこと、それが人権の尊重ではないだろうかと私にも理解できる。自分が人間らしく生きるためにも、まず身近な人々もそうで有る様に、日々の暮らしの中でも心がけて生きていくことが大切だと思う。戦争という悲劇からは、何も生まれない。しかし、祖母の体験談から、私は自然にたくさんの事を学んでいたと気付かされた。そして、辛い思いをした祖母の事を、私が支えて守ってあげなければという気持ちが一層強くなった。

七十年前十九歳だった祖母には、明るく楽しい青春時代は無かつた。その代わり、たくましく、辛抱強く生きる力を身につけた。そして曾祖父の様に、自分に関わる人達に礼儀正しく、平等に接して、できるだけ多くの人達が、人間らしく、自分らしく生きて行ける様に努力して来た。今現在は病気も進行してしまい、昔の様なたくましさや強さは失くなってしまった。昼夜が逆転して、不思議な行動をしてしまったり、同じ話を何十回も繰り返したり、知らない人が見れば、壊れてしまった老人にしか見えないと思う。私もはじめは慣れなくて、どう対応すればいいのか戸惑い、見て見ぬふりをした事も有った。しかし、二十四時間介護している母の姿を見ているうちに、どう接したら良いのか、自分に出来る事は何かが分かってきた。どんどん壊れていく祖母の人格や要望を受け止めてあげる事、そして最後まで人として尊重してあげる事が、家族の義務だと気付いた。一つ一つ失われていく祖母の記憶から、少しでも悲しみが減る様に願いながら、今日も同じ話に明るく返事をしてあげよう。今日も優しい気持ちで、手を引いてあげよう。そして祖母の記憶に、私の笑顔をたくさん残してあげたいと思う。

ぼくの生きる道

千葉県 浦安市立高洲中学校 1年

小林 想 (こばやし そう)

ぼくは障害者だ。なぜって？わからない。生まれつきそういうことになっていた。今は何とか歩けるが、体のバランスを取るのがすごく難しいし、字が書けないという致命的なハンディキャップを抱えている。

ぼくの一番古い記憶は保育園の時だ。当時三歳以上は同じ部屋で生活していて、その時に、ひとつ年上の子から「想ってなんですぐ転ぶの？枯れたチューリップみたい。」と笑いながら聞かれたことがある。その時ぼくは、「分かんないよ、そんなの。」と答えた。本当の答えをあまり知らなかったからである。

だけど、小学生ぐらいの時に（自分はこういう運命なんだ）と悟った。

運動会の時だ。練習でもうまくついていけなかったぼくは、本番でもダンスの移動を間違えて、大幅に皆より遅れてしまい、大恥をかいた。泣いたりはしなかったが、心の中で叫んだ。「全ては、この不自由な体のせいだ、あーあ、こんな体いらないよ。」と。

こんな体をもっていて、大変でしょと言う人がいる。もちろん大変だ。例えばいじめ。これは、障害者じゃない人にもあるかも知れないが、それとはわけが違う。障害者に対するいじめは、正直言って「いじめ」ではなく、「差別」だからだ。

ぼくの体験談だが、ぼくは今年、住んでいる市主催のキャンプに参加した。その時の参加者の中で、ぼくが最年長だった。だから、必然的に班長になってしまった。翌日、班員がうるさかったので何回か注意したが、全く効果がない。先生が出る幕だとも思ったが、先生方はちょうど会議中だった。仕方がなくぼくはかなり強く、「おい、静かにしろよ。」と言った。返ってきた言葉は「ウルセーよ。障害者のくせに威張るな。」だった。ぼくにはかなりキツイが、こんなことは日常茶飯事だ。

ここまでネガティブな話が続いたが、しかし、ぼくの人生が暗闇だけかといわれるとそうではない。いい経験もしている。

ぼくは、小学六年生の時に、はじめてサーフィンを体験した。ボランティアのサーファーに教えてもらう機会を得たのだ。

最初に、海の横の湖みたいところで、SAPという棒を持ってボードに立つことを練習して、慣れてきてから本格的に海に出た。周りにはたくさんのサポートしてくれる人が居たので、安心だった。ボードに寝そべって波に乗るボディー

ボードから始め、だいぶタイミングがつかめてきたところで、初めて立つことに挑戦した。・・・もちろん、失敗。波が押してくる中、ボードが傾かないように調整し、立てるほど、ぼくは器用じゃない。何回も落ちて、溺れそうになって、這い上がって辞めたくもなったが、コーチは諦めることを許さなかった。「障害に甘えるな、やれば出来る。お前なら出来る。どうしてもものところは手伝ってやるから。」と。でも、時間がたつほど、ぼくの足は重くなる。体力の限界が近づいていた。ぼくは、コーチに後五回でやめさせてくれとお願いしてしまった。その五回のうちの二回目、コーチが「いい波が来た、いけるぞ、想。」と叫んだ。ぼくは、最後の力を振り絞り、今まで教えてもらった通りに立つ準備をした。全身の力をひざと足に集中させて立つ。

・・・立った。生まれて初めてのスローモーションだった。すごいぞ！立った！このぼくが波に乗ったんだ！・・・

あれ？と気づいた時には、板から落ち、水の中だった。海から出た時はもうフラフラだったが、とても気分が良かった。波に乗っている時の風、海の音、すべてが爽快だった。そして、何よりも自分に自信がもてた。このぼくが、サーフィンが出来たんだ、最初は、何も出来なかったけど、頑張れば出来るんだ。障害なんて関係ない、要は自分がやるか、やらないか、出来ないことなんて何もない、もう何も怖くないぞ、とこの経験でそんな自信を得ることが出来た。これも教えてくれたコーチやサポートの方達の支えがあったからだと思う。

ぼくは障害者だ。たくさん嫌な思いをしてきたし、大変な思いも常にしている。でも、おなじくらい人から優しくされてきた。だから、何とか毎日元気に過ごせている。すべての人が相手を思い、優しくしたり、むやみに人を傷つけることをしない社会になればいいと切に願う。そしたら、どんな人もその人らしく生きることが出来ると思う。

これからぼくは、周りの方への感謝を忘れずに、不自由な体とうまく付き合い、少しの手助けは必要だけれど、やれば出来るという自信をもってやっていきたいと思う。障害があろうがなかろうが、ぼくらしく生きていく。時に少しブサイクだろうが、それがぼくの生きる道だ。

大島青松園を訪れて

徳島県 神山町神山中学校 3年
佐々木 里菜 (ささき りな)

「差別」という言葉を聞いたとき何を思いうかべるだろう。私はこのハンセン病問題の人権学習を通して「差別」の本当の怖さを知った。

ハンセン病は感染力が弱く、非常にうつりにくい病気だ。しかし、人々のまちがった考えから偏見や差別の対象にされ、ハンセン病患者の方の自由や権利は奪われていったのである。私は、権威ある人の考え方や判断一つで「差別」が生まれ、このような苦しみが生まれるものなのかと、ショックを受けた。

私たちは先日、ハンセン病患者の強制隔離が行われた場所の一つである、大島青松園を訪れた。この島へは船でしか行くことが出来ず、差別の現実を物語っているように感じられた。

まず、私たちは県人会の方々との交流会に参加した。ここではハンセン病回復者の方々が強い差別があった中で実際に経験したこと、感じたことを話してくださいました。その中で私の心にとまったのは「兄弟げんかがなつかしかった。」という、何気ない言葉だ。ハンセン病にかかると療養所に強制隔離される。つまり家族と離れて生活することを強いられるのだ。家族とともに笑い合うことも、机を囲んでご飯を食べることもできない。それは病気が治ってからもずっと続くのだ。回復者の方々はどんな気持ちで一日一日を過ごしていたのだろうか。その気持ちを想像するだけで胸が苦しくなった。

施設見学で私たちは「納骨堂」という場所を訪れた。この「納骨堂」の中にはハンセン病で島に来て、亡くなってもいまだに故郷に帰ることのできない方々の骨つぼが並べられていた。他人に名前が入った骨つぼを見られて、家族が差別に合わないようにという、思いやりから名前を書かない骨つぼがいくつもあった。かけがえのない時間を奪われても、死と向き合っている、なお家族への配慮を忘れないハンセン病回復者の方の優しさに心が震えた。そして、差別というものは「つらく、悲しい」という言葉だけでは言い表せないものだということを実感した。

帰りのバスの中、目を閉じると、私たちの目を見て懸命に話してくれた回復者の方々の笑顔がうかんだ。私の心はなぜかすっきりしなかった。まちがった考えが生んだ差別ではあるが、もっと早く解決する方法はなかったのだろうか。あの笑顔にこたえるために私たちができることは何だろうか。

その日の夜、私は家族に大島青松園でのことを話した。父も母もハンセン病の

ことは詳しく知らなかった。私はパンフレットを片手に夢中でしゃべっていた。強制隔離のこと、できてしまった赤ちゃんが処分されていたこと、亡くなって灰になっても故郷に帰れない人がいること……。私は自分の中の怒りを抑えることができなかった。両親はそんな私に驚きながら

「そんな辛いことが身近なところであったんやなあ。親の世代は知らん人も多いと思うよ。いろんな人権問題があるけど、まずは真実を知ることからやな。勉強になったわ。」

と言ってくれた。

そうだ、私は誰かに伝えたかったのだ。大島青松園で私が感じた悲しみや怒り、そして触れることのできた人間の強さや優しさを、誰かに伝えずにはいられなかった。人生のほとんどをこの島で暮らした回復者の方々は、私たちの前では、生き生きと話をしてくださったが、歩くのがやっつのようなようだった。高齢化していく回復者の方の心の叫びを伝えるのは私たちの使命なのだ。両親とハンセン病差別について話し合えたことがとてもうれしかった。自己満足かもしれないが、私の第一歩だ。そして、これから出会うであろう人権問題についても真剣に考え、正しい判断をし、行動できるようにしたい。それこそが今回、大島を訪れた私たちの責任であり、長い間苦勞された回復者の皆さんにこたえる、唯一の道だと信じている。

「知る」ということ

広島県 呉市立安浦中学校 3年

大山 由宇（おおやま ゆう）

この夏、私たち吹奏楽部は、中学校生活最後になるNHK合唱コンクールに出場する。私たちの学校では、毎年恒例の曲を自由曲として選曲し、練習を重ねている。それが「呉ふるさと讃歌」である。この曲の作曲に携われた前顧問のK先生が今日、私たちのために合唱指導に来て下さった。K先生の指導はこれまでに何度も受け、刺激を受けてきているが、今日の先生の指導はことさら熱かった。普段はとても温和な先生がこんなにも激しく私たちに語られるからには、私たちの合唱に大きく足りない何かがあるからだと感じた。先生が特に強調されたフレーズは「空襲に怯えた戦の空を」の部分である。呉空襲の戦火の中、呉の人々がどんな気持ちで生き抜いてきたのか、イメージして歌うことが必要だといわれる。正直、呉空襲についてほとんど知識のない私たちにとっては難しいことだと感じた。先生の指導はさらに続き、「人間は本当におびえたり苦しかったりしたら、声は出ないし足もすくむ。そのことをあなた達は、歌声を通して、伝えなくてはならない。」「男声パートは、戦の中で恐怖の中、戦った若き人達を。女声パートは、学業を捨て、青春を捨て、兵器を作る工場から朝から晩まで働いた女生徒の気持ちを。」と。K先生の檄は飛ぶものの、「これでよい。」とは言ってくださらなかった。そして、最後に静かに、こうおっしゃった。「合唱は、美しさだけでは成り立たない。たくさんの思いを聴く人に届けることで、感動させなくてはならない。」と。

この日、家に帰ってから私は母に「呉空襲って、そんなに大変だったん？」と聞いた。母は祖母に同じことを聞いていた。母はもちろん、祖母も聞いたことはあるもののあまり知らないようだった。私は、「呉空襲」にかかわる歌を歌い続けてきたにも関わらず、今までこのことについてあまり深く考えたこともなかったことについて、申し訳ないような気持ちになっていた。

このようなある日、新聞で「呉空襲」での被爆体験をもとに紙芝居が完成したという記事を目にした。呉空襲を体験され、今日まで生きてこられた七十八歳の女性が語られたことを呉市在住の絵本作家が紙芝居にしたという。私は、どうしても今、この紙芝居が見たくなった。毎日の部活の合間をぬって、やっとこの紙芝居の原画展を訪ねた。ほんわかとかわいらしい紙芝居の原画に想像していたより穏やかな温もりを感じ、少しほっとした。しかし、その中で一枚の原画の前で足が止まった。それは、呉空襲の中でも最も被害が甚大であった七月一日の空襲

の一場面である。ぎゅうぎゅうづめの真っ暗な防空壕の中で、誰もが押しつぶされて死んでいく地獄のような中で差し出された一人の手と、「もうだいじょうぶじゃあ。しんぱいせんでええど。」という、やさしい言葉によって一人の小さな女の子の命が救われた場面である。戦争という異常な状態の中で誰もが自分の命を守ることで精いっぱいだった時、そんな中でも人のためにやさしい言葉とあたたかい手で一人の女の子を救った人がいたのだ。人間として一番大事なものを奪ってしまう悲惨で残虐な戦争の最中、大切な心をなくさずに生きていた人がいることを知り、私は胸がいっぱいになった。原案を書かれた人も絵本作家さんも命をかけてこの事実を伝えようと、紙芝居に思いを託されたのだと思う。私は、この人たちのおかげで、今回はじめて呉空襲の事実に触れ、人の心の尊さを学ぶことができた。

被爆七十周年を迎えた今年、ヒロシマは節目の年だといわれている。私の曾祖父も原爆の犠牲となり、三十六歳という若さで亡くなった。そして、その妻である曾祖母は被爆手帳を持ち、苦勞しながら三人の子供を育て、九十八歳を迎える。今は亡き祖父がいて、私の母がいて、今の私がいて、命がつながれている。ヒロシマだけではなく、身近な都市呉市にも惨禍があったことをあまりにも私たちは知らなかった。ヒロシマも呉も、ともに戦争による悲しい歴史を持ちながらも必死に生き続け、命をつないできたのだ。

K先生があの時、私たちに託された深い思いを私は三年間かかってようやく受け止めることができたような気がしている。呉空襲を知らないから、うまく歌えないのではない。過去の事実を知ろうとし、自分なりの思いを大切に持って、歌に魂をこめて後世に伝えるつもりで歌うことが、大切なのだと。

最後の合唱コンクールは明日。「母が生まれた、父が生まれた。今はない祖父が祖母が生まれた、私が生まれたこの街で私は友と一緒に生きていこう」のフレーズを、私は仲間と共に誇りをもって、心をこめて歌う。そうすることが私にできるはじめの一歩であり、この曲を歌わせていただく中学生の使命であると感じている。

患者の人権

静岡県 静岡県西遠女子学園中学校 3年

江間 弓華（えま ゆみか）

「病院は病気を治す所です。治療のために血液を使いたいのです…。」

私の兄や姉といっても通りそうな若い医師達が口にした言葉に、私は思わず息をのんだ。隣に座っている母の体が、ぴんっと固くなった。

病院が病気を治す所だということは当たり前のことで、誰もが痛みから逃れたい、健康になりたいと思って行く場所だということは幼稚園児でもわかっているだろう。だが、その時の私はその言葉を受け入れることができず、まるで死刑宣告のように感じた。

「骨髄異形性症候群」。祖母はこの病気と二十数年間闘ってきた。赤血球、白血球、血小板という血液細胞を作る工場である骨髄に何らかの理由で異常が起きたためにかかってしまう病気で、原因は不明とされている。高齢者に多く見られ、重症化すると、急性骨髄性白血病へと移行する場合も多いという。祖母は長い間、病気が進行するのではないかという不安と闘いながら生きてきた。決められた時間を守って薬を飲み、病院へ行き、体調によっては入院して輸血をしてもらう、という生活を二十数年間ずっと続けてきたのだ。

私が物心ついた時には病気だったはずの祖母だが、どんな時も明るく、何もかもテキパキとこなし、生きることを謳歌しているという言葉がぴったりの女性で、姉と私はそんな祖母のことが大好きだった。

その祖母が、体調の悪さを訴えたため病院へ連れていったところ、即入院となった。この時、祖母も私たちも「病気を治すため」の病院へ向かっており、病院も受け入れてくれた。だが、後になって母から聞いた話によると、救急外来の先生には、最悪の場合、余命三ヶ月と宣告されていたという。それでもまだ祖母にとっても私たちにとっても、病院は病気を治すところであり、希望を持って過ごしていた。

しかし、入院から二ヶ月が過ぎても、病状は安定せず、歩いてレストルームまで行っていたのが部屋の洗面台までも車いすを使うようになり、また明日ね、と振る手がみるみる白く、か細くなっていくのが不安でたまらなくなって、毎日のように祖母に会いに行った。

祖母の担当は二十代前半の笑顔の素敵な女性と、優しく語りかけてくれる男性医師で、専門的なことも分かりやすく説明してくれたため祖母も私たちも安心していられた。だが、輸血の回数が頻繁になり、輸血の単位が多くなってきて、

数値が上がらないどころか、すぐ下がってしまうということが続くようになってくると、先生との面談の後、母はすぐに病室に戻らなくなった。どんなに優しく、どんなに分かりやすく説明されても、行きつくところの話は、ひとつを示しているからだ。

「治る見込みのある患者さんに血液を使いたい。病院は病気を治す所なのです。」

原因不明で完治の見込みがない病気であることに加え、高齢であること、持病だけでなく、肺の機能まで弱ってきていること、そして、度重なる輸血や投薬でも状態が改善されないことなどから、祖母にこれ以上の治療は無意味であるばかりか、苦痛を与え続けるだけになる、それならば祖母は緩和ケアに治療の方向を変えた方が良く、そして祖母のために使っている血液を、治るべき人たちのために使いたい。

「正論だよ。病院はそう考えるよね。」

と、つぶやく母に返す言葉が見つからず、面談の後は涙の跡をごまかして病室へ戻るが続いた。

それでも祖母は生きようとしていた。痛いことも苦しいことも、恥ずかしいことも、

「迷惑かけて申し訳ないけど、ばあばは、

まだ生きていたんだよ。がんばるでね。」

と言って毎日を送っていた。生きようと頑張っている祖母に緩和ケアの話をするのは、その思いを断ち切ることになってしまう気がしてなかなか言い出せなかった。

医学的には死が目前であっても、生きたいと、生きようとしている患者に対しどこまで治療を続け、どこで治療の線引きをするのかを決めることの難しさを目の当たりにし、私は人の命を預かる医療の厳しさを身をもって感じた。そして、同時に避けられない医療の限界があることも。

健康で過ごせることは幸せなことだが、体や心に何かしらの症状が出て、病院にかかる時、もちろん病院では治すためにあらゆることをしてくれるだろう。結果、快方に向かえば言うことはないが、祖母のように生きたいと願っても今の医療ではかなえられない場合、治療を続けたいという患者の意思はどうなるのだろうか。死を目前にした（と医学的に扱われる）患者の人権はどこまで守られるべきなのだろう。誰に剥奪の権利があるのだろうか…。

私は将来、新薬の研究開発の道に進みたい。剥奪される人権を一つでもなくすために。

文字の大切さ

徳島県 北島町立北島中学校 1年

橋本 未咲 (はしもと みさき)

私は六年生の時、識字学級に通っている人たちにお話を聞きに行きました。識字学級では、二人ずつのグループに分かれ、文字を学習していました。私は二人のおばあさんから、お話を聞くことになりました。二人とも、部落差別を受けたと言っていました。一人のおばあさんは、家が貧乏だったため小さいころから妹と弟の面倒を見ていました。両親は、工事現場で働いていて、仕事が休みになる雨の日にしか学校に行くことができませんでした。そのため、ひらがなやかたかな、漢字を覚えられなかったそうです。そのことで、学校では友達からいじめられて、学校には行きたくなくなったそうです。もう一人のおばあさんは、ふつうに学校に通っていました。しかし、ある日友達に「どこに住んでいるの?」と聞かれ答えると、急にいやな顔をされて誰も近づいてこなくなったそうです。そして次の日から、「きたない」「気持ち悪い」などひどい言葉を投げかけられたり、いすに押しピンを置かれるような嫌がらせをされて、とうとう学校に行けなくなってしまいました。私は、生まれた場所、住んでいる所で人を見下し、差別することに腹がたちました。文字の読み書きができないまま大人になったおばあさんたちは、生活の中でたくさんの苦勞をします。病院に行っても、自分の住所、名前が書けない。バス停の時刻表を見てもどこに行くか分からない。看板や道路標識が読めないなど、困ることが何度もあったそうです。そして、文字そのものが、おばあさんたちの子どもころに受けたいじめを思い出し、怖かったとも言っていました。あたりまえに学校へ通うことができた私にとって、文字の読み書きができないことが、こんなにも生活することを難しくしているとは想像していませんでした。そして、私がこれから挑戦しようとしている高校受験や、会社に就職する機会を持てなくなってしまうということにも気づきました。

おばあさんは、最初、識字学級に行くのは、はずかしいと思っていたそうです。理由は、おばあさんにもなって文字が書けないことを笑われたり、からかわれたりするのではないかという不安があったからです。しかし、自分の子どもや孫が文字を書けるのに、おばあさんとして情けなく悔しいという思いが、おばあさんを識字学級へ行こうという気持ちにさせていきました。通い始めてみると、みんな自分と同じつらい体験をしていたことが分かってきました。自分の思いを打ち明けることで、ここにいる仲間たちと一緒に頑張ろうと、前向きな気持ちになれたそうです。私は、識字学級を見学するまでは、悲しそうなおばあさんしか想像

していませんでした。しかし、識字学級で学んでいるおばあさんたちは、あんなにもつらい体験をしたにもかかわらず、仲間や先生たちと楽しそうに学びあい、ひとつの文字が書けるようになる度にこぼれてくる笑顔がとても印象的でした。

私は、文字を書けないことのつらさ、いじめられる側の苦しき、文字を知ったことがどれだけおばあさんたちの生きる支えになっているかを感じました。文字の読み書きは、おばあさんたちにとって、生きることそのものだったのです。

私が、つい最近公園に行くと、ペンを持った高校生くらいの人が、遊具に何かを書いているのを見ました。後で見に行くと「死ね」「うざい」「きえろ」と人の悪口が書かれていました。私は、一瞬のうちに人を傷つけてしまうこの文字を見て、とても悲しくなってきました。何の苦労もなく文字を学ぶことができたこの高校生は、文字の持つ重みを分かっていないのだと思います。

私たちの身のまわりにも、手紙やメールのやりとりの中でこの高校生と同じようなことはしていないでしょうか？今、中高生たちの間で携帯電話のメールやサイトコミュニケーションアプリを通じて、友人の悪口を流したり、掲示板に他人を中傷する内容を書き込むことなどが社会問題になっています。軽い気持ちや冗談のつもりで書いた文字が、相手を深くきずつけていませんか？文字を軽く扱っていませんか？

おばあさんたちは、「一つでも文字が書けるようになることが、うれしくてたまらない」と言っていました。何十年もの間、文字を学びたくても学べない。そのためにいろんな苦労やつらい体験をしてきたおばあさんたちから生きる喜びを教えてもらいました。だからこそ、私は、文字を大切に遣い、その文字でまわりの人を元気にしていくような人になりたいと、心から思うようになりました。

「生きる権利・死ぬ権利」

佐賀県 唐津市立浜玉中学校 1年

吉原 直（よしはら なお）

「緩和ケア」

私はこの言葉を六年生の春に初めて耳にしました。完治が望めない患者に対して、一日でも長く延命するよりも、その身体的な痛みや精神的な苦しみをできるだけ軽くすることを目的とした看護のことです。

私の祖父は、一年前の六月、あじさいの花が咲きほころぶころ息をひきとりました。病名は「末期のすい臓ガン」で、おととしの十二月に告知を受け、半年間の闘病生活でした。祖父は病状が進んでもなお、入院はせず、祖母と二人で自宅で花や野菜を育てたり、愛犬をかわいがったり、長い間ずっと大切にしてきたものに囲まれながら穏やかに暮らしていました。私の祖母は、何年も前から体が悪く一人では立って歩けません。祖父が亡くなるギリギリまで自宅にいたのは、そんな祖母への気遣いもあったにちがいません。

祖父の最期は、緩和ケアという場所でした。ガンになるずっと以前から、自分の最期は緩和ケアだと決めていたそうです。

祖父は入所してからわずか一週間で亡くなりました。入所した初日、病室へ持ちこんだアルバムの中から、

「これが一番よか顔ばしとる。」

と遺影になる写真を自分で選び、初孫だった私に申し訳なさそうに、

「じいちゃんの葬式の最期のお別れの手紙ば読んでくれんね。」

と頼んできたのです。私はまだその時、祖父が亡くなるとは全然思ってもみなかったので、よく理解できずにうなずくだけでした。

それから毎日、学校から帰ると欠かさず祖父の病室にかけつけました。祖父は、「おう、よう来てくれたね。学校は楽しかね。」と言ってニコニコ笑っていました。私は、そんないつもと変わらない祖父の笑顔を見るのが好きでした。でもそれから、一日ごとに祖父の様子は変わっていきました。モルヒネという強い痛み止めの薬を使っていた祖父は、次第に日にちや曜日、場所、兄弟や家族、私たち孫のこともわからなくなりました。話もせず、ただぼんやりと過ごす時間が増えました。その数日後、私が病室に入り、

「おじいちゃん。」

とゆっくり大きな声で呼びかけると、いつもの笑顔で手を差し出してくれました。やっぱり私のことを覚えていてくれたんだと思うと、嬉しくもあり、でも胸が張

りさけそうに悲しくもありました。それから三時間もたたないうちに、祖父は亡くなりました。冷たく固くなっていく祖父の体を祖母、母、おばさん、いとこたちとみんなでさすりながら、祖父を見送りました。母やおばさんたちは泣きながら、でも途中からは全員笑顔でした。痛く苦しい病気と闘っていた祖父がもう苦しまなくていいからだと安心したからです。

祖父が選んだ「緩和ケア」という最期は、点滴や薬をほとんど使わず、心臓マッサージも人工呼吸器も輸血も行わないという方針です。祖父が入院してからも、祖母だけはずっと一人でこの方針に反対していました。病棟の先生、スタッフ、母、おばさんたちは祖母が納得するまで何度も説明や話し合いを重ねたそうです。とにかく延命優先を希望する祖母に対して、母やおばさんたちは、

「緩和ケアを最期の場所を選んだお父さんの意思を尊重してほしい。」
と必死になって繰り返し主張したそうです。

祖父が緩和ケアを望んだのには理由があります。以前ガンで亡くなった祖父の兄たちが最期までずっと点滴の管やチューブにつながれていたり、意識も反応もないのにただベッドに横たわっているのを目の当たりにしたからです。祖父は、自分の足が動く間は愛犬と散歩に出かけたり、一輪車いっぱい野菜を収穫したり、気力がある間は自分で運転して私の発表会に来てくれたり、祖母の通院を手伝ったりしていました。入院してからも、絶対にトイレは自分の足で向かい、ナースコールを自分では一度も押さず、とにかく我慢強く、自分よりも周りを優先する人でした。そんな祖父だったからこそ、延命を望まなかったのだと思います。自分でできることは最期まで自分の力でがんばりたいという祖父らしい姿です。

私は祖父の生き方から、人が人として生きる意味を学びました。そして、人が人として死ぬ権利があることも学びました。人が人としてとは、その人の望むことだと思います。祖父のように自分の力でしっかり生き抜くことや、死ぬ場所や死に方を自分で選択し決定することが人権を尊重することにつながるはずです。祖父の意思を尊重し、守ろうと力をつくしてくれた緩和ケアの方々にも、私は感謝しています。私も私らしく、精一杯毎日を生きて、祖父のように自分の意思をしっかり持てる人になりたいです。

名前も知らない、あなたへ

福岡県 大野城市立大野中学校 3年

大塚 奏 (おおつか かなで)

今こうして、名前も知らないあなたへ手紙を書いています。あて先も分からない便りですが、いつかあなたの目に留まることを願いながら、書き進めます。

昨年十二月五日の夜、自宅の電話が鳴りました。私たち家族が暮らす福岡県の隣、佐賀県の警察署からでした。

「捕まえました」。その前の年の五月、私たちの家に侵入し、お金を盗んだあなたを逮捕したという知らせでした。

家族でプロ野球観戦に出かけた、あの夜。マンションの外壁工事の足場を伝い、五階の留守宅に侵入したあなたは、母が台所の引き出しに収めていた一万円札七枚と、小銭をまとめていた小さな袋を持ち去りました。

表情を失った母、厳しい口調で通報する父、慌ただしく動き回る警察の方々。日付が変わり、ようやく少し落ち着いた頃、父と母が同時にまったく同じことを口にしました。

「金で済んで良かったな」「本当、お金だけで良かった」。この言葉の意味が、理解できますか。中学一年の私と小学四年の弟。もしも、子どもたちだけで留守番をしている時に泥棒が入っていたら、驚いて叫び声を上げていたら、どうなっていたことか。両親は最悪の場面を想像したのです。

翌日、家中の窓に二重、三重の補助鍵を取り付けました。外出前も帰宅後も、母は何度も何度も鍵を点検するようになりました。子どもだけの留守番もできなくなりました。

よく聞いてください。あなたが盗んだのはお金だけではないのです。何より大切な子どもの安全を脅かされ、金額では表せない恐怖を植え付けたのです。私と弟を守ることを考えてくれる両親の姿に、私は、あなたを絶対に許さないと、一時は心に刻みました。

一年七か月後のまさかの逮捕に、私と弟は興奮して、あなたの名前や年齢、住所などを次々と父に尋ねました。でもなぜか、答えてくれません。納得できない私たちに、父は古い新聞記事を見せながら、十数年前の自分の過ちを打ち明けてくれました。

当時、私たちが住んでいた町で、高齢の夫婦が三十代半ばの息子を殺すという事件がありました。職を失い、トラブルを起こしてばかりの息子のために、夫婦はいつも謝っていました。そんな日が六年も続きました。

ある夜、息子が近所の保育園を名指しして「園児を殺す」と予告しました。それを食い止めるため、父親は決断しました。翌朝、眠っている息子の頭を木のバットが折れるまで殴り、スカーフで首を絞めました。動かなくなるまで足を押さえていたのは、母親でした。

裁判では、執行猶予の判決が言い渡されました。裁判長は「同じ苦しみを持つ家庭の力になってほしい」と諭したそうです。

しばらく後、父がよちよち歩きの弟と散歩をしていると、向こうからその夫婦が寄り添うように歩いてきました。一瞬、目が合いました。父は仕事の関係で二人の顔を知っていましたが、気付かないふりをしました。すると、夫婦は腰を深く、深く折って、繰り返し頭を下げながら通り過ぎていったのです。顔を伏せ、もう二度と目を合わせようとせず。

「あの時、お父さんは『事情を知っている者の目』をしてしまったんだろう。それがご夫婦に伝わった。今でも申しわけない」と父は言いました。

私は、父が何も答えなかった理由に気づきました。社会に戻ってきたあなたと私たちが万が一顔を合わせた時、「あの時の犯人だ」という表情をすることがないように。そのことで、懸命に立ち直ろうとするあなたの心を傷つけたり、逆上したあなたが私たちに危害を加えたりすることがないように、と。

今回の事件をきっかけに、償いについて考えました。償いとは、加害者が反省から更生へと踏み出すことについて、被害者が許し、認めること。そして、加害者が二度と同じ過ちを繰り返さないこと。この二つがそろって初めて、償いになる。これが、今の私なりの結論です。

私たち家族は、あなたを許しています。償いの半分は終わりです。しかし、本当に苦しく、難しいのはこれからです。再犯率という恐ろしく大きな数字がそれを証明しています。

あなたは今、どこで、何をしていますか。働くことで七万円を得ることの大変さ、働いて得た七万円の重みを感じていますか。「あいつは泥棒だったんだ」という卑怯なささやきが、耳に入ってくることはありませんか。それは、立ち直ろうとするあなたの心をくじくでしょう。でも、耐えてください。それを言い訳にして、逃げないでください。

私はあなたの名前も、顔も知りません。それでも、あなたを見えています。償いを成し遂げる日を待っています。逃げない、負けないあなたであるよう、応援しています。

ピアノを弾けないピアノの先生

埼玉県 日高市立高萩北中学校 1年

田島 光貴 (たじま こうき)

ぼくの通っている音楽教室の校長先生は車イスで生活しています。三十歳を過ぎた頃、原因不明の病気を発症して以来、起き上がることもできない日が続き、何年もの間入院していましたが治らず、自宅で療養することになったそうです。人がそばを通っただけで、全身に激痛が走るといふ難病でした。

病気になる前の先生は、音大でピアノを教えていました。一日十二時間以上も、毎日生徒さんとピアノにむかっていたのですが、少しも苦しむことはなかったそうです。ピアノを弾くことしかなかった人生の中から突然病気にピアノを弾くことを奪われてしまった先生でしたが、なんと、自宅でピアノ教室を始めてしまったのです！自分の病気を嘆くことより、「良かった。これで娘のそばに毎日いてあげられる。」と思ったそうです。ピアノを弾くことができない人がピアノ教室を始めるなんて普通の人には考えられません。最初の頃は、そうと知ると、話を聞きに来た人達は皆、去って行ったそうですが、近所の子ども達が通うようになって評判になり、二十年後には全国からたくさんの人が通う大きな音楽教室になっていました。

先生のすごい所は逆転の発想です。体が動かなくなったから、それまで忙しくてできなかった研究を、家でじっくりする時間ができたと考え、絶対音感のプログラムを作り上げました。ほとんど寝たきりの体ですごい気力です。できないことを嘆くことなく、見方を変えてチャンスにしてしまう。努力は並大抵ではありません。

そんなすごい先生も、知らない人から見れば、車イスに乗った障がい者の老人です。道の端に停まっている時に、じゃまだと言わんばかりに頭を叩いて通る心ない人がいるのだそうです。しかも、一度や二度ではないというのです。この人達は、人の中身を想像することができない人なのでしょう。ぼくは本当に驚き、なんとも言えない悔やしく悲しい気持ちになりました。ぼくが今、ピアノを勉強しているのは、先生が認めてくれたおかげです。誰よりもできないことが多く、他の人と一緒に同じことができないぼくでしたが、先生は皆の前で、ぼくの演奏を「花マル満点。」と言ってくれました。それまでなぐさめられることはあっても、本当にほめられたことはなかったのだと思います。ぼくに向けられた心からの言葉は、小さかったぼくにも良く分かりました。先生が心から認めてくれたおかげで、ぼくはピアノが好きになりました。あの日の先生の言葉で、ぼくの人生

は変わったと思っています。

先生は物を大切に（しすぎる？）人です。あなの開いたくつ下はていねいに縫ってはく。形ある限り、何年も同じ服を大切に着る。先生のだんなさんも同じように物を大切に人だそうです。ある日二人で、音楽教室のお金をおろしに銀行へ行った帰り、後ろから来た男にいきなりお金の入った封筒を奪われてしまったことがあったそうです。数百万円もの大金が入っていました。あわてて交番に届けに行ったのですが、二人の身なりがあまりにも質素だったので、「そんな大金を持っていたはずがない。」と、おまわりさんに信じてもらえなかったそうです。

人が人を判断する基準は何でしょう。

見た目で判断していないでしょうか。

着ている服や家庭の環境、学歴、成績、人とうまく話せる人、人見知りな人、運動能力がすぐれている人、自信がある人、ない人、世の中にはいろいろな人がいます。そして一人一人違ってきます。できることや持っている物が多い人は偉い人なのではないでしょうか？自分よりできないことが多い人を、自分より「下の人間」と思っていないでしょうか。人の価値は持っている物だけではないはずですよ。

校長先生は三年前の寒い冬の日、小さな風邪がもとで、突然亡くなってしまいました。先生が毎月一話ずつ書いてくれた「教室通信」には、先生の考えていたことや身の回りで起きたこと、先生が伝えたかった思いが書かれています。先生は亡くなってからも、いろいろなことを伝え、励ましてくれます。文章の力はすごいです。直接話を聞いたかのように心に残り、いつでも先生に会うことができるようです。

ぼくは思います。

価値ある人は、

上を向く気持ちのある人

人の心を動かすことのできる人（感動）

人の心を暖かくする人

本当に大切なことを知っている人

自分と他人を大切に思うことができる人

ぼくの音楽教室の校長先生は、ピアノを弾けないピアノの先生です。でも誰よりもピアノを弾くことの意味を教えてくれた最高の先生です。

「おじいさんの気持ち」

大阪府 履正社学園豊中中学校 2年

三井 仁 (みつい じん)

僕の町内は、お年寄りを見守る環境を整えようと努力している。常に声をかけたり、孤立しないように、集まって食事会やイベントを計画したりしているようだ。近所に住むお年寄り夫婦は子どもがいなくて自分達でこまっていたので僕の母が後見人になってもう一年ぐらいお世話をしている。おばあさんは認知症が進んでいて、毎日出歩いてしまう。幸い遠くへは行かないので近所の人で見守っている。母は後見人になってから毎日大変忙しくしている。本来、後見人は日々の生活のお世話までしなくてもいいのだけれど近所で毎日目にすると放ってはおけないらしく、洗たくやそうじ、時には買物もする。デイサービスにお願いできるそうだが、おじいさんが、知らない人に何でもたのむのに抵抗があるらしい。夏休みで僕も少しは役に立つことはないかと、おじいさんとおばあさんの家に行った。おばあさんは少し前に見たより、大分認知症が進んでいるのが見てとれた。僕は立ちすくむしかなかった。母がさっさと用事しているのがすごいなと思った。

庭におじいさんがいたので、話しにいった。おじいさんは庭でトマトやナス、朝顔の種を植えて育てていた。

「これは紫の花がさくんや。」

「ナスは一つだけ残してまた来年のために種をつくっとくんや。」

とにこにこして、説明してくれた。まだ少しちいさなナスと青いトマトを指さして、

「これ、あと少ししたら、とりにおいで。」

と言ってくれた。うれしくて2日後、また僕はおじいさんの家に行った。すると、じっと庭ですわっているおじいさんが何か様子がおかしい。

「おじいちゃん。」

と声をかけると、だまっている。おじいさんの見ている先に目をやると、トマトやナスや朝顔がなくなっていた。

「あれ、何でなくなってるの。」

と聞いても、だまっていた。

すると、家からおばあさんが出てきた。ごみ袋をさげて出てきた。よく見ると、トマトやナスや朝顔が根元から引き抜いて入れてあった。どうやらおばあさんはそれを雑草とまちがえたのか全部根元から引き抜いてしまったのだ。

「あっ、そなんしたらあかんやん。」

と思わず言ったがおじいさんは

「ええんや。わしがしたんや。」

と言った。僕はだまってそのまま家にかえって母に話した。すると、やはり、引き抜いたのはおばあさんらしい。今回だけでなく、何度もこんなことはあるが、その度におじいさんは、おばあさんをかばうそうだ。母が言うには、おじいさんはおばあさんを認知症だと思いたくないらしい。おじいさんの中では、おばあさんは元気な時のままのおばあさんでいてほしい。他の人から認知症と思われて、そのようにあつかわれたくないのだ。もっと認知症が進み施設に入らないといけないようになったら、とそんな不安があるのだろう。

僕はどうすることもできない認知症の病気の現実と、おじいさんの気持ちを考えると胸がつまる思いだった。

母は僕に「おばあさんを責めたり、おじいさんにその事で何も言ってはいけない。」

と言った。

そっと見守るといふことのむずかしさを知った気がする。

僕はおじいさんが好きないちじくを買って持っていった。おじいさんは、にこにこして

「ありがとう」

と言って皮をむいておばあさんに食べさせていた。二人ともににこにこして先ほどのことを忘れていたようだった。

「また遊びにくるわ。」と言うと、

「絶対来てや。」と二人が言った。

ごみ箱にすてられたトマトとナスと朝顔の苗が見えた。

僕はごみ箱にフタをして家にかえった。

いじめを通して

兵庫県 多可町立中町中学校 3年

吉川 亜未（よしかわ あみ）

小学生の頃から中学生になってもある「いじめについてのアンケート」。あの時まではこのアンケートは意味のないものだと思っていた。いつも「いいえ」に丸をつけて回収されるその紙は、私にとってただの紙切れだった。でも、私が小学五年生になった時、そのただの紙切れだと思っていたアンケートは、私を救ってくれる唯一の命綱のように思えた。

クラス全員から無視された。聞こえるように悪口を言われ、楽しく話している子達は皆私の悪口を言っているのだと思った。言われたことをしなければ暴力を振るうと脅された。全く関係のない責任を押し付けられた。いじめられていた頃はクラスメイト全員が敵に見えた。クラスに入る瞬間のあの冷たい空気と視線は今でも鮮明に思い出せる。誰も口を利いてくれない訳でもなく、ニュースやドラマの様なひどいものでもなかったが、まだ小学生の私にとってとても辛いものだった。そして原因も分からないままずっと耐えていた。

そんなある日の「いじめについてのアンケート」。今まで全く必要だと思っていたいなかったその紙切れの「はい」に初めて丸をつけ、私をいじめていた子達に見つからないように提出した。これで全て終わる。すぐに学校が楽しくなる。まだ小学生だった私は単純にそう思っていた。

ニュースでたまに見かけるようになった子どもの「いじめ」による自殺。そのニュースを見るたびに私は「自殺を防ぐ方法はなかったのかな」と思う。ニュースではまた男子中学生が命を落としていた。彼は色々なことを一人で抱え、自ら命を絶った。しかし、彼はしっかりとSOSを出していた。生きようと、今の状況から抜け出そうとしていたのに。どうして周りの人達は彼の精一杯の叫びを受け止めてあげることができなかったのか。彼は毎日の日記でそれを訴えていたらしい。救えるのは担任の先生だけだった。先生の行動次第で彼の未来が変わったかもしれない。私の場合、「いじめについてのアンケート」の「はい」に丸をつけたことで、学校に気付いてもらえた。両親にもうちあけることができ、状況は変わっていった。両親が学校に出向いてくれたり、他のクラスの友達が励ましてくれたり、学校中の先生達が私を守ってくれたり。その力を借りることができたお陰で「いじめ」が辛く苦しい思い出から、自分自身が大きく成長したように感じる事ができた。例えば、いじめにあったことで相手の気持ちをより深く考えることができるようになった。一度言った言葉はもう取り消すことはできない、

そう思いながら相手にかける言葉の一言一言を大切に伝えようと思えるようになった。しかし、今でも時々「今私の悪口を言っているんじゃないか。」など、急に怖くなることもある。「いじめ」のことを完全に忘れたと思っけていてもやはり傷は消えていないのだ。それは私だけでなく今までいじめられたことのある全ての人があるのではないかと思う。

「いじめ」を乗り越えた時、人は大きく成長すると思う。でも「いじめ」は決して許されない。いじめはなぜ起きてしまうのか。学校という小さな社会の中で自分と反りが合わない人や苦手な人がいるのは当然で、その人とうまく付き合っていくのは本当に難しいと思う。一人ひとり個性があって自分の「普通」が相手の「変わっている」になっているかもしれない。自分が全て正しいと思ひ込み考え方の違う相手を批評する。それが「いじめ」につながってくると私は思う。一概に「いじめをなくす」と言っけて簡単になくなるものではない。だから今「いじめ」をしている人はもちろん、ただ周りで見ている人やまだ幼い子ども達にも「いじめ」というものの残酷さや醜さを知っけてほしい。私一人の小さな力ではどうにもできないけど、まずは一人ひとりがいじめる人にも、見っけてだけの人にもならないこと。そして、一番大切なこと、それはもしもあなたが心ない人達にいじめられたとしても絶対に命だけは捨ててはいけなないということ。今の状況が辛いのであれば逃げたらいいい。しかし、自ら命を絶つような逃げ方だけはしてはいけなない。「死」が怖くなくなるほど絶望に陥っけているかもしれないが、あなたの命が消えたとき、一番深く傷つくのは誰だろう。それは、あなたをいじめた人でも周りで見っけていた人でも先生でもなく、あなたの両親である。そのことは決して忘れてはいけなない。あなたが一番大切にしている人を、あなたを一番大切に思っけている人を傷つけないでほしい。あなたを救う人は必ずどこかにいる。今、私はここにいる。私を救っけてくれた人はもちろん、私を成長させてくれたいじめっ子にも少し感謝している。

心ない行為で深く傷つけられた世界中のすべての人々の傷が一日でも早く癒えますように。いつかこの世界から「いじめ」がなくなりますように。